

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River

菊

池川には「イダ」という魚がいます。どういうわけか、あまり親しみのある魚ではありません。ハエよりもずっと大きいのですが、美味でないためか、小骨が多いためか、食卓に上ることが少ないからだろうと思います。菊池川本流の流れのゆるい所では30センチもあるような大物が水面に跳ね上がってバシャツと音を立てているのを良く見かけます。支流の三加和地区の和仁川や十町川にはほとんど溯上してきませんので、どんな魚か見たことのない人が多いかもしれません。子どものころ、菊池川沿いの人に「あの魚はなんですか」と聞いても「あれはイダたい」と実に素っ気ない返事をきくばかりでいつも不満でしたが、私には非常に興味のある魚でした。十町川で梅雨の増水している時ハエを釣っていたら、何か強力な力で糸を引き回すものがあります。ナマズかなと思って慎重に引き上げたらこの辺では珍しいイダだったのです。嬉しかった思い出として今も忘れません。しかし現在ではイダもアユも殆ど見ることはありません。

標準名はウグイ。東京付近ではハヤまたはホンバヤというようですが中国、四国、九州ではイダといます。ウグイという品のいい名前をもっていますが、鵜食(ウ)が好んで食べることから「鵜食い」と言われるようになったそうです。四国の四十川ではイダを捕るのにイタチの皮で脅して逃げ出したイダを網で捕るといって「イタチ追い込み漁」というのがあります。イタチもやはりイダが好物なのでしょう。

コイ目コイ科ウグイ属。日本全土に分布し、サハリンや中国東部にも分布します。河川の上流域から下流域まで広く生息し、下流域は汽水域から内湾、海岸近くまで分布します。菊池川中流域では30センチ前後ですが、海に降るものは型が大きくなり菊池川や緑川の河口付近では60センチクラスの大型が釣れることがあります。ウグイには海へ下るタイプと純淡水性の二つのタイプがあるようで、北へ行くほど海へ下る率が高くなるということです。普通の魚の住めないような酸性の強い水域にも生息できて環境への順応性は強いようです。汽水域から湾内、外海の沿岸近くに生息しているものも、春先の産卵期には純淡水域に溯って瀬の砂礫底に球形で粘着性のある卵を産みつけます。4〜7ごろの婚姻色は雌雄とも背側、腹側に沿って大きな赤色の縦状の帯が現れます。



食性は雑食性で、付着藻類、底生生物、子魚など幅広い食性を持ち、釣り餌にはソーセージ、パン、サナギ、毛針、ルアーなどなんでもかかるようです。魚肉の味としてはあまり評判がよくありませんが、冬から春の産卵期までがおいしくて「夏のウグイは猫も食わぬ」という言葉もあります。イダは死んだら生臭くなるので、生きているうちに料理しなければなりません。また子魚が多いので焼いたり煮付けたりする時には小幅に刻みを入れるといいと思います。コノシロを料理する時の要領です。釣ったイダは普通20センチ前後はありますので結構料理甲斐があります。私は少年の頃、たしか夏だったと思いますが何度か味噌汁にして食べたことがあります。結構おいしかったような記憶があります。わたしの魚好きのせいでしょうか。

歴史調査の楽しみ方

日平城跡31

大田 幸博

(元菊池川流域同盟水援隊副委員長)

今

回は、総まとめの付記として、日平城跡が、いかに大規模な山城であるかという事と、山の地形によって、縄張りが、全く異なったものになる事を、同じ県北に所在する、著名な筒ヶ嶽城跡(小代氏の山城・荒尾市・玉名市)と比較しながら、お話ししたいと思います。

まず、掲載図面からです。両城跡の図面の縮尺には、違いがあります。日平城跡が「1万分の1」、筒ヶ嶽城跡が「5千分の1」です。何故かと言いますと、筒ヶ嶽城跡を同じ縮尺にすると、図面の大きさが4分の1となり、広報の紙面では、縄張りが分からなくなるからです。縄張りを計測数値で示しますと、日平城跡は、東西1.7km×南北2.05kmの範囲に、遺構が分散しています。これに対して、筒ヶ嶽城跡は、南北675m×東西250mに収まりますから、日平城跡の大きさの程が分かります。

次に、山の地形です。日平城跡の尾根は、ヒトデのように複雑な形をしてい

ます。飛び地の北側生尾根(城山)もあります。城地の中心部は、山頂下(岩場)の皿郭平場にあり、井戸が現存します。裾部には空堀、周りには堀切や堅堀が造営されています。放射状に分布した小山(城山など14箇所)は、「物見の場」に仕立ててあります。縄張りの把握は、難しいものがあります。

筒ヶ嶽城跡は、尾根が、典型的な帯状地形になっています。山頂のI郭を中心に、南北両側に、I郭〜VI郭の造成区画があります。井戸は無く、東下の谷水(水ノ手)を利用していたようです。尾根筋には、大小12本の堀切を数えます。南北両端と西端の尾根は、山道に変化して、縄張りが確定できます。

まとめです。何故、一武将の小森田氏は、大規模な山城を持てたのでしょうか。さらに、複雑な縄張り造りの技術は、どこで取得したものでしょうか。歴史調査の楽しみ方は、この辺りにあります。



筒ヶ嶽城跡縄張り図



日平城跡縄張り図